様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月３１日現在

機関番号：１３４０１
種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：２２６５２００４
研究課題名（和文）　日本の哲学辞典編纂史に関する研究：三木清編『現代哲学辞典』の批判的検討

研究課題名（英文）　Research on the History of Compilation of Philosophy Dictionaries in Japan: Critical Investigation of Kiyoshi MIKI (ed.) "A Dictionary of Contemporary Philosophy"

研究代表者
宮島　光志（MIYAJIMA MITSUSHI）
福井大学・医学部・准教授
研究者番号：90229857

研究成果の概要（和文）：哲学者の三木清（1889－1945）が編纂した『現代哲学辞典』(1936 年）は、日本で初めて大項目主義を採用した画期的な哲学辞典であった。だが、同書はわずか５年で大幅に改訂され、その『新版現代哲学辞典』(1941 年）も翌年には発禁処分を受けた。この哲学辞典は日本の戦時下における出版文化を映し出す鏡である。同書は学術性と時事性の両方を具備することを目指したのであり、日本の哲学辞典編纂史上に並びない位置を占めている。

研究成果の概要（英文）："A Dictionary of Contemporary Philosophy" (1936) edited by Japanese philosopher Kiyoshi MIKI (1889-1945) was an epoch-making philosophy dictionary, for it originally adopted so-called the main headings principle in Japan. However, the dictionary was substantially revised within only five years and then, "A New Dictionary of Contemporary Philosophy" (1941) was banned in the following year. That dictionary is, so to speak, a mirror by which publishing-culture under the wartime Japan was reflected. It aimed to equip with both an academic and a journalistic character, and so occupied a unique position in the history of compilation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	0	500,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：日本哲学

１．研究開始当初の背景

(1) 三木清編『現代哲学辞典』(日本評論社、初版 1936 年/新版 1941 年/第２版 1947 年）は不遇な図書であり、いまなおその書誌情報すら不正確である。同書は戦後日本の読書界に最初に登場した哲学辞典であり、終戦直後の混乱状況のなかで一時の務めを終え、ほんの数年で歴史の藻屑と消えていった。だが、同書の編集に携わった樺俊雄は、後に三木清を追慕しながら、この辞典について次のような核心的な（ただし、あくまでも暗示的な）

証言を残している。「彼〔三木清〕の名で刊行され、実際の編集は私〔樺〕に任されていた日本評論社の『現代哲学辞典』は、あの当時としてはインテリゲンチアによる最後の良心的な学問的反抗の試みではなかったかと思う。この辞典の刊行にはかずかずの秘められた事が隠されているが、それは一種の統一戦線的性格をもっている、と言えるだろう。」これは 1967 年に『三木清全集』の月報に掲載され短文であるが、爾来 40 余年が経とうとするいまなお、この辞典を扱った研究は皆無である。

(2) 例えばドイツ啓蒙主義哲学の研究であれば、重要な哲学用語の形成（ラテン語からのドイツ語化）をめぐる「概念史的研究」が極めて重要であり、哲学辞典編纂史の跡づけは基礎的作業に属する。近代日本哲学の形成と展開についても、そうした基礎研究が必要であると考え、本研究を構想した。

２．研究の目的

(1) 本研究の全体構想は日本の《哲学辞典成立の現場》を包括的に解明することである。その端緒を拓くためにまず〈辞典編集者としての三木清〉に着目し、彼が編纂した『現代哲学辞典』の存在意義を多角的に考察する。私見によれば、日本で戦後に刊行された哲学辞典（事典）は、すべて多少とも同書の影響を受けている。同書の複雑な成立事情に光を当て、戦前から戦後にわたる日本の哲学辞典を適切に性格づけるための視座を獲得する（大項目主義と小項目主義の対立など)。

(2) 三木清はジャーナリズムに軸足を置きながらアカデミックな活動も行ったが、逆にアカデミズムに軸足を置きながらジャーナリスティックな活動も行った人物で、戦前の哲学辞典編纂に圧倒的な影響力を持っていた人物が、桑木厳翼である。そこで本研究では、日本の《哲学辞典成立の現場》を複合的な視点から考察するために、大正期を代表する啓蒙哲学者（しかも、今日ではすっかり忘却されている）桑木厳翼の影響力も、考察の主要な対象とする。

３．研究の方法

(1) 三木清編『現代哲学辞典』はその先駆性ゆえに戦中戦後を通じて時代の荒波に翻弄され続け、わずか十余年で数奇な運命を辿り終えた。数々の謎を秘めた同書の〈改訂作業〉に焦点を絞って、新旧両版の違いを一覧できる〈対照表〉を作成し、三木が時局を睨みながら断行した改訂の意義を批判的に検証する。すなわち、僅か５年で断行された大改訂の実情を、①学問の趨勢（新たな成果)、②社会の趨勢（時局への対応)、という両面から、両版の主要項目を相互対照することによって、その内実を厳密に跡づける。

(2) 資料史的研究として、三木清の旧蔵書（法政大学付属図書館の三木清文庫）を調査し、哲学辞典編纂に関する情報（三木の書き込み、引用の典拠など）を収集する。また、同辞典の出版社を訪問し、改訂の事情と記録などについて、内部資料の提供を求める。

４．研究成果

(1) 三木清編『現代哲学辞典』の独自性を輪郭づけるために、同書に先行する哲学辞典を網羅的に検討した。すなわち、『哲学字彙』以後の金字塔『大日本百科辞書〈哲学大辞書〉』(1909)、圧倒的な影響力を誇った宮本和吉他編『岩波哲学辞典』(1922/24[増訂]) および（その携帯版と目される）伊藤吉之助編『哲学小辞典』(1930/38[増訂]) を筆頭として、久しく忘却された次の諸編も対象とした。具体的には、朝永三十郎編『哲学辞典』（1905/24)、渡部政盛著『最新哲学辞典』（1923)、高木斐川著『学説人名用語大辞典〈哲学之部/倫理之部〉』(1925/26)、『大思想エンサイクロペヂア 26〈哲学辞典〉』(1928)、哲学研究会編『現代哲学辞典』(1930)、桑木厳翼監修『哲学辞典』(1934) である。各書の「序文」を比較検討した結果、次の事情が明らかとなった。すなわち、20 世紀初頭から 30 年代にかけて哲学ブームが起き、手近な「啓蒙書」として哲学辞典が広く求められるようになった。そうした読書界の要求に応えるべく、「学術性」を誇るタイプと、むしろ「通俗性」を旨とするタイプの哲学辞典が、競うようにして刊行されたのである。

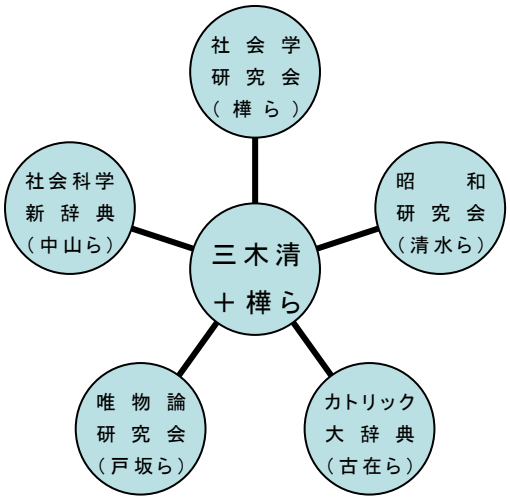
(2) 取り分け三木清編『現代哲学辞典』は、それら両タイプの統合を図りながら、それまで類例のなかった「大項目主義」の採用によって、日本の哲学辞典出版史上にまさに新生面を拓いた、という事情が確認できた。この点については、法政大学図書館の三木清文庫を調査した結果，三木が大項目主義のモデルにしたという Vierkandt 著『社会学小辞典』など辞典類には、少なくとも三木自身による書き込みなどは何も見当たらなかった。辞典編纂の舞台裏を垣間見るという当初の期待は、残念ながら裏切られた。ちなみに、辞典の共編者であった樺俊雄の諸著作（取り分け歴史哲学と文化社会学に関するもの）が三木文庫には多数が収蔵されていたが、それらの

内容を樺の執筆項目と比較対照するならば、新旧『現代哲学辞典』の成立事情（特に書き換え）をさらに突っ込んで解明できるものと思われる（これは将来の検討課題となる）。なお、ゲーテ関連の収蔵書を瞥見し、三木のゲーテ解釈の有力な典拠を確認できたことも、この資料調査の副次的な成果である。

(3) 三木清編『現代哲学辞典』の初版（1936）を新版（1941）に改訂するさいに、一体どのような〈書き換え〉が行われたか。その実情を「世界観」「教育学」「心理学」「アメリカ哲学」「日本の哲学」「日本精神」などの項目に即して、具体的に検討してみた。その改訂作業の中枢にあった樺俊雄は後年、「何分にも戦争の危機が迫っていたので当局の検閲はきわめて厳しくなっていた。そのために一部の執筆者の名前を変名に取り変えたり、字句の訂正を行ったりしたので、編集はきわめて難航した」と述懐している。この証言は、本研究に貴重な示唆を与えてくれる。例えば「アメリカ哲学」の場合、記述内容に本質的な差異は認められないので、改訂にともなう執筆者の交代（早瀬利雄から清水幾太郎）はたんに執筆者名の変更（変名措置という便宜上の対応）にすぎなかったものと推測される。だが他方で「教育学」や「心理学」の場合、新版の記述内容は学術性が飛躍的に高くなっている。ところが「世界観」や「日本精神」の場合には、複雑な問題が認められる。すなわち、新版への改訂によって、旧版とは明らかに異なったイデオロギー性が盛り込まれているように見受けられるのである。そうした「イデオロギー」性をめぐる詳細な検討は、今後の課題として残された。（なお、以上の対照作業は、三宅浩史氏の協力によって推進された。この場を借りて謝意を表したい。）ちなみに、三木の代表作『人生論ノート』所収の幸福論についても、初出（『文学界』）から単行本として刊行されるまでの間に重要な加筆がなされている。《三木清著『人生論ノート』の成立史》がきわめて刺激的な文献学的および思想史的な研究課題となり得ることを、この機会に指摘しておきたい。

(4) 『現代哲学辞典』が日本の哲学辞典編纂史上に占める独自の位置（および三木哲学の先駆性）を見定める一つの目安として、戦後の日本社会においても一気に重要性を増した「環境」概念の定着過程を検証した。すなわち、同書に前後する各種の哲学辞典（４．研究成果の(1)を参照）について、欧米語の各原語（英 Environment, 独 Umwelt, 仏 Milieu, など）からの翻訳語とその記述内容を、網羅的に検討した。その結果、①まさに『岩波哲学辞典』を境として、従来の「環象」「囲繞界」「外囲」など多様な訳語に対して、今日の「環境」という訳語が最終的に勝利を収めた、②そして『現代哲学辞典』の場合、別個に立項されてはいないが、新旧両版の間で「環境」関連の記述が全面的に差し替えられた（模索状況の痕跡）、という２点が確認できた。こうした研究成果は、遠からず個別論文として公表される予定である。

(5) 『現代哲学辞典』は、昭和初期に少壮の社会哲学者たちが形づくっていた幾つもの知的ネットワーク（下図を参照）を糾合して、そこで渦巻いていた巨大な知的エネルギーを吸い上げて刊行された。



国家主義に対する〈学問的反抗の統一戦線〉模式図

旧版『現代哲学辞典』の序には、「現代哲学研究会」が同書を刊行したと記されているが、その実体は「社会学研究会」（編集委員の樺俊雄・甘粕石介・加茂儀一ほか）であり、それに加えて「唯物論研究会」（戸坂潤ほか）も深く関与していた。　他方で上智大学内の『カトリック大辞典』編集室も、古在由重を中心として三木・戸坂・清水幾太郎などが集うサロンとして重要であった。そして『新版現代哲学辞典』のアジア重視は、三木と清水が深く関与した「昭和研究会」による「東亜協同体論」を反映したものである。さらには三木と中山伊知郎らが編纂した『社会科学新辞典』（河出書房、1941）も同書と双生児であり、久野収の謂う「抵抗線」を成していた。こうした本研究課題の立案当初の見込みは、その後、周辺人物の各種証言によって、一定の裏づけを得ることができた。それらの知見を、当時の社会情勢（取り分け知的状況）をめぐる考察によってさらに肉づけした上で、個別論文として公表したいと念じている。

(6) 本研究の副産物として、①大正期を代表する講壇哲学者、桑木厳翼の重要性を再確認

し、その文献学者（取り分けカント文献学）としての功績に照明を当てた。②桑木の証言を手掛りとして、明治末期に交換教授として（新渡戸稲造により？）米国から招聘されたドイツ人哲学者、ギュンター・ヤコビーについて調査を行った。これら２点については、いわば「近代日本哲学の死角」として、今後さらなる研究が求められる（取り分け日本の「プラグマティズム受容史」の問題として）。その端緒を開くことができたのは、本研究の思わぬ成果と言ってよい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 宮島光志、三木清と戦時下の出版文化―全集未収の婦人論と哲学辞典の改訂をめぐって、福井大学医学部研究雑誌、査読有、12 巻、2011、53－71
http://hdl.handle.net/10098/5114

② 宮島光志、三木清編『新版現代哲学辞典』の現代性―抹殺された哲学辞典の存在理由を問う、東北哲学会年報、査読有、26 号、2010、97－98

〔学会発表〕（計３件）

① 宮島光志、桑木厳翼とギュンター・ヤコビーをめぐって―新カント学派とプラグマティズムの交差、名古屋哲学研究会例会、2012 年３月 10 日、名古屋市立大学（愛知県）

② 宮島光志、三木清と“milieu（中間者/環境）”の哲学―多様な「環境」概念をめぐる系譜学的考察、名古屋哲学研究会・日本思想史部会例会、2011 年８月 27 日、名古屋市立大学（愛知県）

③ 宮島光志、桑木厳翼とカント文献学―講演「カントの観たる日本」の現代的意義、日本カント協会第 35 回学会、2010 年 11 月 13 日、新潟大学（新潟県）

６．研究組織

(1)研究代表者
宮島　光志（MIYAJIMA MITSUSHI）
福井大学・医学部・准教授
研究者番号：90229857

(2)研究分担者
（なし）

(3)連携研究者
（なし）